

国際文化学部鹿毛敏夫教授の

「願超～豪商・仲屋家の堺支店長～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2016年10月29日(土)

大友時代を 生きた人々



鹿毛 敏夫

奈良の天理大学付属天理図書館が蔵する「三聖寺文書」の中に、「替へ状の事」と題する興味深い古文書があります。

「一、銀子合わせて五貫八百目定、爰元で請け取りたて候。堺の津において右の前五貫八百目の分、三聖寺へたしかに御渡しあるべく候。ただし此状、三聖寺ならで、よの人所持候いて永々用いざるもの也、殊に天秤の儀は願超所持のたるべく候」

天正2(1574)年7月11日付で大友氏の家臣利光彦三郎に発給された「替へ状」(為替状)の案文(控え)で、その差出人は豊後の大豪商「仲屋宗越」です。京都の東福寺塔頭の三聖寺は、鎌倉時代から豊後国大野荘内に所領を保有していました。その三聖寺に対し、戦国期の大友氏は年貢徴収・納入の請負を契約します。

この史料では、天正元(1573)年分の年貢(銀5貫800匁)の納入を請け

負った利光彦三郎が重たい銀のまま京都に運ぶのではなく、紙切れ1枚の「替へ状」に交換して三聖寺に届けたのです。

この為替状を豊後で発行したのが仲屋宗越なのです。が、現代の郵便為替と同じように、現金(銀)化する際の条件が3点記されている。

まず。

第一に5貫800匁の現銀化は堺で行うこと。第二に銀の受取人は三聖寺に限定すること。そして第三に現銀化の際に計量に使う天秤を願超が所持するものに特定すること。

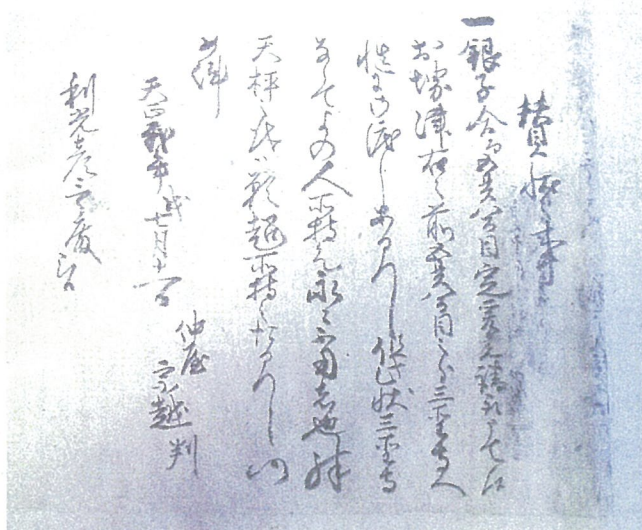
「大友興廢記」によれば、豊後豪商仲屋宗越の営業形態とそのネットワークは「府内の居住をつかまづりながら、大坂、堺、京いずれの地にても、富貴繁華の所には一家ずつ持ち、下代を遣わし、あるいは一門の末をも遣わし置けり」との状況でした。このことから宗越発行「替へ状」を携えた三聖寺に銀を支払う場所とは、豪商仲屋家が堺で営業する支店であると推測できます。

そして、その堺支店で銀の計量に使用する「願超」所持の天秤とは、仲屋家の初代次郎左衛門入道「願通」から引き継いだ豊後規格のはかりでしょう。



天正年間(1574-1592)に近畿地方まで商圏を拡大していた仲屋家は、当主「宗越」の他に、「仲屋浄泉」「浄教」ら一門による商業活動とネットワークによって維持されていました。「願超」は、そのうちの堺の店舗を任せられた一門と推測されます。

豪商・仲屋家の堺支店長



堺の「願超」所持の天秤を指定した仲屋宗越の為替状(三聖寺文書)

(名古屋学院大学国際文化学部教授、大分市出身) 毎月1回掲載